



歌舞伎から生まれた言葉

「愛想づかし」「市松模様」「黒幕」「正念場」「なあなあ」...
普段何気なく使っている言葉の多くが歌舞伎などの古典芸能に由来しているのを知っていますか？
こうした言葉から古典芸能を見てみるとまた違った楽しみがあるかも知れません。
今回の展示では、こうした日常使われている古典芸能の用語について取り上げてみました。



目次

歌舞伎という言葉の由来	2
歌舞伎由来の現代語	2
おはよう挨拶も歌舞伎から	8
展示資料紹介	9

企画・構成 国立音楽大学附属図書館広報委員会



歌舞伎という言葉の由来

1603年、出雲の巫女を名乗るお国が京で「かぶき踊り」を踊った。これが歌舞伎の始まり。長く続いた戦乱ら終息したばかりの荒れ果てた街を「かぶき者」が闊歩していた。「かぶき」は動詞「かぶく」の名詞化。漢字では「傾く」と表記。意味は「世の中の習俗や常識に従わず、異様な身なりや言動をする者」。よく言えば「時代の先端を行く者」、悪くいえば「異端者」「はみ出し者」。

お国は男装し、寸劇と歌・踊りでかぶき者が廓の女たちと戯れる姿を描写した。お国の踊りは先端風俗のかぶき者を描いたので、かぶき踊りと名付けられた。

中世の先行芸能である能は仮面を付けて心霊を描いたが、お国は仮面を捨て、歌と踊りで、俗世間の人間を描いた。エロスを解放したといってもいい。

歌舞伎由来の現代語

「愛想づかし(あいそづかし)」

一般:相手が嫌になってつれない態度をとる。

歌舞伎:相思相愛の男女が縁を切る場面。縁切場とも言う。

「板に付く(いたにつく)」

一般:物腰などがその職業・立場等によく似合っている。

歌舞伎:俳優の芸(演技)が舞台に調和している。

「一枚看板(いちまいかんばん)」

一般:そのグループを代表する人物。

歌舞伎:江戸時代、劇場の表に掲げられた大きな看板、外題(題名)とその一座を代表する主演俳優の舞台姿が描かれていた。その一座の売り物の俳優。

「市松模様(いちまつもよう)」

色違いの正方形を互い違いに組み合わせた紋様。石畳模様。寛保元年(1741)若衆方(のちに女方)の初代佐野川市松がこの模様の衣装を着たことから、一般の女性たちも競ってこの模様を使ったため大流行し、市松模様と呼ばれた。

「裏方(うらかた)」

歌舞伎の発展・進化に伴って、次第に職掌が分業化され、舞台に出て観衆と向き合う役者、楽屋で働く裏方、見物席・事務所で働く表方に専門化していった。「裏方」には、狂言役者(劇作家)、地方(音楽演奏者)、大道具方、小道具方、衣装方、床山(髪師)などが含まれた。(現代は照明・音響担当者も)

「お家芸(おいえげい)」

一般:得意とするもの。

歌舞伎:家に代々伝わる得意芸。

「大立廻り（おおたちまわり）」

一般：つかみあいの派手な喧嘩。

歌舞伎：規模の大きい立廻り。（少人数の写実的な争闘場面）

「大詰（おおづめ）」

一般：物事の最終段階。

歌舞伎：長い作品の最終幕。江戸では、寛政期（18世紀末）まで、一日の長い作品を一番目（時代物）と二番目（世話物）に分けて上演していた。一番目の最後の幕を大詰、二番目の最後の幕を大切（大喜利）といていた。

「大向うを唸らせる（おおむこうをうならせる）」

大衆の賞賛をあびる。大向うは天井桟敷を意味し、その席は安価であり芝居好きが幾度も通って俳優に声をかけた。そのため、その席で見ている人々も意味するようになり、更に転じて大衆の意味も持つようになった。

「十八番（おはこ）」

得意芸。よくやる動作。七代目市川団十郎が幕末に家代々の俳優が得意としてきた芸 18 作品を選び、「歌舞伎十八番」と名付けたことから始まっている。

「御曹司（おんぞうし）」

一般：身分や地位の高い人の子どもを、とくに敬ってということば。中世末にはとくに源の義経のことを一般に御曹司といった。

歌舞伎：座頭（その一座を統率する最高の役者）級の名優の子息のことを御曹司と呼んで特別待遇をする。

「楽屋（がくや）」

俳優等の出演者や裏方が出演準備や休息に使用する場所。元来は舞楽（舞を伴う雅楽）の用語で、演奏する場所と準備・休息する場所を併せて「楽之屋」と言っていたが、装束を着けるなど準備をする場所の意味になった。初期歌舞伎の楽屋は舞台のうしろを幕や板で囲っただけの簡素なものだった。

「切り口上（きりこうじょう）」

一般：形式ばった堅苦しい言い方。

歌舞伎：歌舞伎の一日の興行の終わり（切）に座頭や頭取が述べる口上。

「口説き（くどき）」

一般：くどくどと繰り返していう。愚痴をいう。しきりに意中を訴える。

歌舞伎：長い長い心中の吐露、くどくどと心情を述べ立てて嘆き悲しむのが「クドキ」の本質。

「クドキ」は元来日本の語り物芸能の用語だった。中世の平曲で、くどくど同じような節を繰り返し朗詠のように節をつけて語る箇所を呼んだ。現在の日常における使用法は、「忠臣蔵」で「色よい返事聞くまでは、口説いて、口説いて、口説き抜く」という男女の間でしきりに懇願する意味で使われた。

「黒幕（くろまく）」

一般：自分は表に出ず、他人を操って、影響力を行使する人。

歌舞伎：歌舞伎の黒幕は、主として夜の場面を表す背景幕として使われるほか、死んだという設定の人物を消す（隠す）ための消し幕や、舞台の不必要な部分を隠す幕（袖幕など）としても使用され、見えないという記号になっている。

「こけら落とし（こけらおとし）」

一般：新築した施設の開場式。

歌舞伎：こけらは材木の削り屑のこと。以前の民家の屋根はほとんどがこけらで葺かれていた。新築または改築工事の終わりに、屋根や足組などの削り屑のこけらを払い落とす、めでたい習慣があった。これにならって、江戸時代、歌舞伎劇場の新築工事の最後に屋根の上の削り屑（こけら）を落としたことから、劇場工事の完成を意味するようになり、更に新築開場興行もいうようになった。余談だが、職人の1日の労働時間の長さや、材木の乾き具合が早いことなどから、「こけら落とし」が行われるシーズンは、秋が圧倒的に多い。

「御注進（ごちゅうしん）」

一般：告げ口。

歌舞伎：注進は、歌舞伎の時代物で、合戦の戦況を報告する役をいう。派手な身振りで登場し、「御注進、御注進」というのでこの名がある。

「差金（さしがね）」

一般：陰で人を操ったり、そそのかしたりすること。

歌舞伎：黒く塗った棹の先に針金をつけ、蝶・小鳥・小動物や鬼火などを操る小道具。黒は見えない約束なので、黒く塗った細い竹竿の先端に、じゃり糸という濃紺の細い糸やクジラの髭、またはピアノ線を付けて弾力を持たせ、その先に造り物の蝶々や雀をつけて操作する。焼耐火（幽霊が出る時に燃える火）などが登場する場面でも使われる。「後ろで糸を引く奴がいる」のように使われる。差金・黒衣・黒幕は人形浄瑠璃と歌舞伎の用語から出ているが、差金の概念はまったく別である。

「鞘当（さやあて）」

一般：一人の女性をめぐる二人の男性の争い。

歌舞伎：武士同士すれ違った際、刀の鞘が当ること。またはそれを咎めだてして争うこと。歌舞伎はこの鞘当を趣向として取り入れた。歌舞伎の鞘当では二人の男が一人の女をめぐる争う。

「三枚目(さんまいめ)」

一般:滑稽なことをする人。道化的な人物。

歌舞伎:江戸時代、大坂の劇場には、看板の三番目に道化役の名前を書く習慣があったことから、道化役の別称となった。

「芝居(しばい)」

もともとの意味は芝が生えているところ、芝生の場所。「芝生」は、最初は社寺の境内などの神聖な芝生の意味で使われていた。室町時代に、猿楽や田楽の勤進興行が露天に舞台をこしらえて行われ、柵で囲った芝生の場所が見物席に当てられた。

「愁嘆場(しゅうたんば)」

一般:悲劇的な場面。

歌舞伎:善良な庶民が身の不幸を嘆き悲しみ愁嘆の涙を流す場面。

「修羅場(しゅらば)」

一般:激しい争いの場面。

歌舞伎:写実的な戦闘場面。

「正念場(しょうねんば)」

最も大事なところ。ここぞという大切な場面。歌舞伎では、役の本心・心底を表現する大切な場면을性根場(しょうねば)といい、それが転訛した。

「捨てぜりふ(すてぜりふ)」

一般:別れぎわにいう、相手を脅迫・軽蔑する言葉。

歌舞伎:台本に書いていないせりふを臨機応変にいうこと。

「世界(せかい)」

江戸時代の中ごろからさかんに使われてきた言葉。歌舞伎狂言の特色を知るうえで、きわめて重要なキーワードのひとつ。狂言の背景になる時代、事件(ストーリー)、登場人物の名前とその性格・立場・行動パターン・おもな場面設定などすべての面にわたり、大幅な改変を許さない、作劇上の前提としてあらかじめ存在する枠組みを指して、これを「世界」と名付けていた。

「世話女房(せわにょうぼう)」

一般:手際よく家庭を切り回し、夫の面倒をよくみる妻。

歌舞伎:貧乏や病気などで苦しむ庶民を描く場面(世話場)にでてくる妻。

「千両役者(せんりょうやくしゃ)」

一般:実力と風格を兼ね備えた、優れた人物。

歌舞伎:一年間に千両の給金を貰う役者。千両の給金をとったのは、二代目市川団十郎が最初と言われている。

「だんまり」

一般:黙って、何も言わない。

歌舞伎:暗闇という設定で、せりふを発しないで、互いに相手を探りあう演出または場面。

「ドサ廻り(どさまわり)」

一般:決まった本拠地を持たず、地方公演をして回る芸人や劇団の総称。

歌舞伎:歌舞伎の隠語で旅興行を指す。江戸時代の佐渡への島流しの「佐渡」を逆にした等の説があるが、語源は不詳。

「とちる」

一般:物事を失敗する。

歌舞伎:せりふを忘れたり、言い間違えたりすること。

「泥仕合(どろじあい)」

一般:お互いに相手の弱点を暴きあうような醜い争い。

歌舞伎:泥まみれで行う立廻り。

「どんでん返し(どんでんがえし)」

一般:物事が最後になってひっくり返る。

歌舞伎:立体的に飾ってある屋体を90度後ろに倒し、背景の絵が描かれている底辺を垂直に立てる舞台転換。がんどん返しとも言う。どんでん返しの演出は大詰に行われる。

「なあなあ」

一般:物事を馴れ合いで行う。

歌舞伎:歌舞伎の定型的な演技の一つ。二人の登場人物が内緒話をする場面で、甲が乙の耳元に口を寄せて「なあ」といい、乙が「なあ」とうなずき返す。

「二枚目(にまいめ)」

一般:やさ男。美男子。

歌舞伎:「江戸時代、大坂の劇場には、看板の二番目に若手の和事師(やわらかい演技を得意とする俳優)の名前を書く習慣があったことから、若手の和事師を指す。和事では美男子の俳優が女性的な演技をすることから、美男子、やさ男の意味に転じた。見るからに貫禄のある座頭ではなく、女性に人気抜群の若立役の場合が多い。本来の二枚目は、いつも失敗して人に笑われながら、女性から圧倒的に好かれるような男の典型。

「のべつ幕なし(のべつまくなし)」

一般:物事が絶え間なく続くこと。

歌舞伎:のべつはひっきりなし、ぶっつけの意味。幕間のない長丁場の芝居を形容する語。

「ノリ」

歌舞伎:「音楽に乗って演技すること」、動詞「糸(三味線の絃)に乗る」のこと。

能・狂言:「リズム感」「リズム形式」の意。

「ノル」は、「鮮明にリズムを表わすこと」「テンポを速めること」「拍子に合わせる部分」。

「花形(はながた)」

一般:現代語としての花形を外来語で言えばスター。

歌舞伎:花形の語源は「花方」。歌舞伎の役柄に関する呼称は、起源的には「方」であった表記をすべて「形」に改めて使ってきた。元来「花方」は、年齢や役柄と関係なく、「実方(みがた)」という演技の実力のある人に対して明るくはなやかな芸風を持つ役者のこと。

「花道(はなみち)」

一般:華やかな行路。惜しまれて引退する。ゴルフ場のグリーン手前のフェアウエー。

歌舞伎:客席左後方から客席の中を通り舞台まで延びている道。役者の登場(出端の芸)と退場(引込みの芸)の両方に使われる。それだけ、場幕の内に消えたあとに残る感動の余韻を楽しむとする観客大衆の心情を反映しているのである。

*初期の歌舞伎では、役者に祝儀を捧げることがあった。観客が芸能者に衣装、布施、金銭を当座の褒美として与えることも古いならわしだった。現代でもカーテン・コールの時に花束を渡したり、お芝居などではお金を紙に包んで舞台上に投げることもある。

「半畳を入れる(はんじょうをいれる)」

一般:野次を飛ばす。

歌舞伎:半畳は畳表に布を貼った小さな敷物で、江戸時代の劇場で観客に有料で貸していた。俳優の演技が気に入らない観客がこれを舞台に投げ入れることがあり、それを半畳入れるといった。

「幕の内弁当(まくのうちべんとう)」

一般:俵の形をしたご飯に数種類のおかずがついた弁当。

歌舞伎:幕間に観客が食べる、俵の形をした握り飯におかずがついた弁当。

*舞台の正面に引かれている「定式幕(じょうしきまく)」は、幕引き役の人が手で引いて左右に開閉するもので、三色の布を縦に縫い合わせた弾幕で、色と配合は江戸三座の各座によって独自のものを定めていた。物事の終結を意味する「幕を引く」もこの幕のことを指す。幕が引かれて芝居が終了すると、次の幕が開くまでかなりの時間がかかるので、この間に食べる簡便な弁当のことを「幕の内」と称することが始まった。(おそらく江戸だけの用語だった)

「幕を引く(まくをひく)」

舞台の正面に引かれている「定式幕(じょうしきまく)」は、幕引き役の人が手で引いて左右に開閉するもので、三色の布を縦に縫い合わせた弾幕で、色と配合は江戸三座の各座によって独自のものを定めていた。物事の終結を意味する「幕を引く」はこの幕のことを指す。

「見得(みえ)」

日常の動詞:「見得を切る」。

歌舞伎:「見得をする」。

歌舞伎独特の演技法。演技の途中で大きく身体を動かした後、固定したポーズをとること。目を大きく開いて睨むのが大事。演技にアクセントをつける。初代市川団十郎が考案したと言われ、はじめは荒事だけに用いられていた。語源は「見ゆ」または「見える」が名詞化したと考えられている。本来「見え」と表記されていた。外観、見た目、外見の意味である。「見えがよい」のように使われた。絵画的に美しくという歌舞伎の美の基準であった。現在一般に使われている「大見得を切る」などの言い方は本当は正しくない。

「見せ場(みせば)」

一般:他人に見せる価値のある場面。

歌舞伎:劇中の最も重要な場面・局面。

「めりはり」

一般:物事に起伏がある。

歌舞伎:せりふの音の緩急・強弱・高低・伸縮がハッキリしていて、観客に鮮やかに聞こえること。

おはよう挨拶も歌舞伎から

夕方であろうが、深夜であろうが、芸能界の人たちは関係者に会うたびに「おはようございます」という。

この奇妙な習慣は、江戸時代の歌舞伎のしきたりからきている。現在の歌舞伎は、昼夜2回興行が普通だが、江戸時代には照明器具がなかったため、日没前に終演していた。そして今とは違い、長時間の作品が多かったため、いつも関係者が顔を合わせるのは「おはようございます」の朝や午前中だった。そのときの風習からきているのである。

展示資料

「二枚目」錦絵

お千代半兵衛 三重櫻賭曙(みゑたすけせたひのあけぼの)

上演 文化10年(1813年)7月 中村座

役者 二代目沢村田之助(おちよ)、三代目坂東三津五郎(半兵衛)

明烏夢の泡雪(あけからすゆめのあはゆき)

時代 安政2年(1855年)11月

役者 坂東しうか(浦里)、八代目市川団十郎(時次郎)

考証 団十郎は安政元年8月、しうかは安政2年3月に死亡しているため、この絵は二人の死後に描かれたもの。

曾我梅菊念力(そがきょうだいおもいはりゆみ)

上演 文政元年(1818年)2月 都座

役者 三代目尾上菊五郎(大工六三郎)

法四季紙家橋拙(たむけのしきかきつのふつつか)

上演 文久2年(1862年)3月 市村座

役者 十三代目市村羽左衛門 [五代目尾上菊五郎](願人家橋坊)

図書

服部幸雄著『歌舞伎のキーワード』

岩波書店, 1989 請求記号 C47-821

服部幸雄著『歌舞伎ことば帖』

岩波書店, 1999 請求記号 C63-593

赤坂治績執筆 ; 服部幸雄監修『歌舞伎ことばの辞典』

講談社, 2000 請求記号 C64-702

吉田千秋写真 ; 服部幸雄監修『歌舞伎いろは絵草紙』

講談社, 1991 請求記号 C54-473

戸板康二著『楽屋のことば』

駸々堂出版, 1986 請求記号 J57-379

河竹登志夫監修『原色歌舞伎詳細』

グラフ社, 1982 請求記号 C59-051

日本浮世絵協会編『原色浮世絵大百科事典第11巻 ; 歌舞伎・遊里・索引』

大修館書店, 1982 請求記号 C35-273

赤坂治績著『歌舞伎 : ことばの玉手箱』

有楽出版社, 2004 請求記号 J102-191

早稲田大学演劇博物館編『芝居絵に見る江戸・明治の歌舞伎』

小学館, 2003 請求記号 J100-585

渡辺保(ほか)編著『カブキ・ハンドブック』

新書館, 1993 請求記号 C58-142

渡辺保著『歌舞伎のことば』
大修館書店, 2004 請求記号 J102-250

服部幸雄文 ; 一ノ関圭絵『絵本夢の江戸歌舞伎』
岩波書店, 2001 請求記号 J92-952

雑誌

『演劇界』
日本演劇社, 1943- 請求記号 P0920

参考文献

長田暁二著『知ってるようで知らない音楽おもしろ雑学事典』
ヤマハミュージックメディア, 1999 請求記号 C64-163

『歌舞伎 : 歌舞伎の魅力大事典』
講談社, 1981 請求記号 R774/K



展示パンフレットは図書館ホームページからも入手できます。(バックナンバーも公開しています。)
<http://www.lib.kunitachi.ac.jp/tenji/tenji.htm>